

二〇二五年度

恵泉女学園中学校 第一回 入学試験問題

国語（四五分）（全一八ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏 名

一、かんこ（かなこ）は高校二年生で、三人きょうだいの二番目です。兄は家を出て結婚けっこんしており、弟は母方の祖父母の家から高校に通っているため、父母と三人で暮らしています。父方の祖母の通夜つやに久しぶりに家族がそろいました。かんこと両親と弟は、亡くなった祖母の家に泊とまることになりました。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には、一部改めたところがあります。）

かんこが居間の隣となりの和室もどに戻ろうとすると、弟の顔を携帯画面けいたいの光が照らしている。寝ねていないのかと小声で訊きくと、「埃ほこりっぽい、この部屋」言いながら弟が寝返りをうった。弟は昔からぜんそくだった。言われればかんこもたしかに素足すあしが痒かゆいような気がした。

「薬とってこようか。たぶん車にある」

「いい、いい」弟は起き上がり、鼻を擦こする。首をだるそうに前に出したままぼんやり部屋を見回すしぐさに、獣けものらしくなったと思った。思えば兄のしぐさも、突然とつぜん獣らしくなったときがあった。兄は父の背丈せたけをとうに越こし、弟もまた追ぬい抜ぬこうというところだった。

「母さん、寝てんの」弟は、まだ電気のついて居る居間のほうへ目をほそめる。

「困ったもんだね」

「さっきのは姉ちゃんもひどかった」

「どうして」居間に出てゆく弟の背に向かって、かんこは言った。水を流す音が聞こえた。「兄ちゃんが出て行ったのは、うちがお

かしくなったからだ、全部あんたらのせいだと言った」台所から、弟は少し声を張る。水を二杯^{はい}くんで、弟はひとつを「はい」とよこした。

「母さんが、どうしてなのかなってずっと言って、にばかり責めるから。本当のことでしょう」

「⁽²⁾わからないよ。兄ちゃんだって横暴だったよ。家のことやらないで外ほつつきまわって、毎晩つくってあったものも食べない。姉ちゃんだって同じだよ、食欲ない、けんかになるから一緒に^{いっしょ}食べたくないって。捨てるとき、母さんがどれだけ悲しんで、どれだけ泣いたか、わかってる。あげくのはて、兄ちゃんは学校も何も言わずにやめて出て行って。すごかった。⁽³⁾わかるよ、ぼく、あの時期母さんと父さんが兄ちゃんをなじったのも」

「なじったどころじゃなかった。夕飯一緒に食べてればすぐ酔^よってからまれて、しぬしぬ、しぬしぬって騒^{さわ}ぐのに、それで翌日にはきれいさっぱり忘れられているのに、いられたもんじゃない」

「それは」弟はにやりとした。「ずっとそうじゃん。ウチは」

「ひどいと思わない」

「ひどい、ひどい。みんなひどいね」

鶏^{にわとり}が先か A が先かの話だと弟は言うのだった。かんこは、細いコップに入った水に光の輪がゆらめいているのを眺^{なが}めた。居間の光だった。弟は、たいいていの場合において冷静で、正しかった。いまでも正しいことを言っているのかもしれない。だが、とかん

X

こは思う。⁽⁴⁾ 喉^{のど}から何かがあふれでそうになった。様々の夜がよぎった。あれを仕方なしとするのはあんまりではないかという思いもあった。コップのふちに口をつけた。

それから弟は、国の話をした。政治や経済^{けいざい}の話、芸術の話、教育の話をした。父も兄も、かんこの家ではなぜか男性陣^{じん}ばかりがそういう話を好んでしたが、かんこにはよくわからなかった。そういったものたちはいつも壁^{かべ}の向こうにある気がした。中心部で決定されたものは壁の内側だけを塗り替^かえて、外側にいる人間には届かなかった。助かるものとそうでないものがあるのは、どうしようもないことだ。少なくとも自分の苦しみが国や時代の変化ひとつでどうにかなるという考えは、かんこにはどうしてもできなかった。いや、もしかすると、何らかの制度と自分の苦しみとはつながっているのかもしれないし、遠い未来、いくらか改善されることもあるのかもしれない。だがすべてが遅^{おそ}かった。何もかも遅かった。人が傷つく速度には、芸術も政治もなにもかも追いつかない。「そういうのってさ」かんこは言った。「結局、助けてくれないわけじゃない、誰も。国がどうなったって、時代がどうなったって人間が人間である限り何も変わらない気がする」

「そうかね」弟は静かに言った。「ぼくは意味あると思う」

弟はなおも話し続ける。寝入ろうかという頃^{ころ}になって、弟の話は過去に移った。かんこは瞼^{まぶた}の裏を見ていた。沈黙^{ちんもく}のなかに弟の声だけが流れている。ぼくさあ、これはもう全然いいんだけどさあ、受験生^{けんしゅうせい}のときにさあ、あのさあ、覚えてる。

「なに」

「姉ちゃんぼくの声変わりの最中に喧嘩して、それで声を気持ち悪いって言った」

そうだった、とかんこは答えた。よく覚えていた。古本が目の前に積み上がっているのが見える。どうやら昔の文豪の文学全集だった。革張りの本は読み終えた新聞のようにビニール紐でくくられている。いつから読まれていないのかわからないが、祖父のものでろうと思った。祖母は本を読まない人だった。

「ひどかったんだよ」弟はおどけた。深刻さを欠いた声だった。「その声で喋るなど言われて、この声しか出ないと言ったら、わざとだと言う。のどが詰まって、ならどうすればいいと思った。ぼくしばらく喋れなかった」

「ひどい」他人の愚痴に同調するような言葉が口をついて出た。

B

。身じろぎ、天井を見上げる。暗く丸

い電灯のなかに、小さく常夜灯がついている。目の奥が痒くなり、瞬きをする。それは、ひどい、とかんこはまた胸のなかで繰り返した。なによりもまず謝らなければならなかった。だが弟の声は軽やかすぎて、かんこの謝罪も浅く響くだけだと思った。

「悪かった。ごめん。ごめんね」

全然、と弟が咳払いする。

「やっぱりとってくる」かんこは身を起こし、居間の椅子に置かれた母の鞆から車の鍵を出した。

敷布団にふれていた背中が心もとなかった。うまくのみこめないまま、先ほどの弟の話が頭のなかで繰り返されていた。なぜそんなことを言ったのだろうと思った。それだけのことを言っておいてなぜ傷つけた記憶として残っていないのだろう。重くとらえきれ

ない自分にぞっとした。かんこにとってそれは口論のなかのひとつの言葉でしかなかった。そして弟は傷ついた顔もせず、何かしら言い返したのだと思う。そういった出来事はないものとして扱われやすく、実際先ほどまでその言葉は、かんこの記憶のなかで大した意味を持って残っていなかった。

かんこはまた、そのあたりの時期、しばらく弟が喋ることができなくなったのを思い出した。その後、声変わりの時期が終わっても、弟は感情が高ぶるとつかえつかえ物を話すようになった。怒るときもどこかにやついた表情を隠さなかった。何か親に訴えるときも、へらへらしながら涙を流すようになった。

(5) 受け取り損ねたと思った。先ほどの言葉が弟の、傷ついた記憶の告白だったかもしれないということに、今更気が付いた。あの出来事が傷つけた記憶として残っていないことを弟はどう感じたろう。つらいのは、痛みでもなく、それに絡む恥でもなく、傷をあたえたと思えないことだ、と思った。痛みにかろうじて耐えられるのは、それが痛みだとわかるからだ。だがそれをないものとされると、人は、そのずれに苦しむ。弟はすでに、泣いて責め立てることが無意味だと知っていた。だからこそ、事実だけ告げて、かんこに思い出すことを促しているのかもしれない。

(宇佐見りん『くるまの娘』より)

問一 全部あんたらのせいだと言った とありますが、「言った」の主語はだれですか。答えなさい。⁽¹⁾

問二 わからないよ とありますが、何が「わからない」と言っているのですか。解答欄に合うように二〇字以内で答えなさい。⁽²⁾

問三 わかるよ、ほく とありますが、だれのどのような気持ちがわかると言っているのですか。答えなさい。⁽³⁾

問四 A にあてはまる漢字一字を答えなさい。

問五 喉から何かがあふれでそうになった とありますが、このときのかんこの気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。⁽⁴⁾

- ア 困惑 こんわく イ 不満 ウ 激怒 げきど エ 失望

問六 X 「の内容に合っているものには「A」、そうでないものには「B」と答えなさい。

ア 弟は、芸術や政治が人間の苦しみに寄り添う必要はないと考えている。

イ かんこは、国や制度は自分を救ってくれるわけではないと思っている。

ウ 父と兄と弟は「壁」の内側にいて、外側にいるかんこを見下している。

エ かんこは感情にまかせて発言しているが、弟は落ち着いて話をしている。

問七

B

 にあてはまる最もふさわしい言葉を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 軽々^{かるがる}しかった イ 苦々^{くるくる}しかった ウ とげとげしかった エ よそよそしかった

問八 受け取り損ねた⁽⁵⁾と思った とありますが、このときのかんこの気持ちを四〇字以内で説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には、一部改めたところがあります。）

「科学的」と言うとき、私たちはそこに、客観的で揺るぎないものである、というイメージを持ちます。学校でも、理科が好きな人は「答えが一つに決まるから」「理屈で考えられるから」という理由をあげます。しかし、そうした科学への信頼を利用して人を信じ込ませようとする人たちもいます。代表的なものが「疑似科学」です。

「疑似」とは「似ているけど違う」という意味で、「ニセ」と言い換えてもいいかもしれません。「科学もどき」と呼んでもいいでしょう。

科学的な手法で証明されたように見えますが、よく検討すると科学的根拠がないもの、あやしい仮説に科学者がお墨付きを与えてそれらしく見せているものなどがあり、科学に詳しくない人にとっては、見分けるのがやっかいです。

二〇年ほど前、『水からの伝言』というタイトルの写真集がベストセラーになりました。各地の水道水や湖の水を凍らせ、できた氷の結晶をカラー写真で紹介したものです。

（中略）

さて、この写真集は「水は言葉を理解する」という仮説に基づいています。その主張や実証方法に私は当初から違和感を覚えたのですが、まずは彼らの手法を紹介します。

透明な瓶に水をいれ、日本語で「ありがとう」と書いた紙を瓶の内側に向けて張ります。しばらくして瓶の中の水のしずくをガラス板の上に垂らして凍らせます。すると、きれいな結晶ができます。

いっぽう、「ばかやろう」とか「ムカツク」「死ね」といった否定的な言葉を書いた紙を張った瓶の中の水は、結晶にならなかったり、整っていない結晶になったりするといっています。

英語やハングルなどの外国語で試した実験でも、同様の結果が得られたそうです。

言葉ではなく、さまざまな音楽を「聴かせた」水を凍らせてみる実験も紹介されています。クラシック音楽や仏教のお経では、きれいな結晶になり、悲しい歌詞の民謡や、攻撃的な歌詞とリズムが特徴のヘビーメタル音楽は、結晶ができない、という結果が紹介されています。

水が文字を認識し、意味を理解する能力を持っている、ということだけでも天地がひっくり返るような発見ですが、聴覚まであるとは初耳です。⁽¹⁾ あとがきには「ひとりよがりの本になるのではなく、みなさんからご意見をいただいて、この研究を科学的、哲学的な意味合いに引き上げていく方向に向かうことを願っています」と著者のコメントがありました。

みなさんはどう受け止めましたか。カガク力が少々身についた私からすれば、これは典型的な疑似科学です。

そう結論付ける理由を説明する前に、科学のお作法について理解しておく必要があります。ここでは、有名な「万有引力の発見」

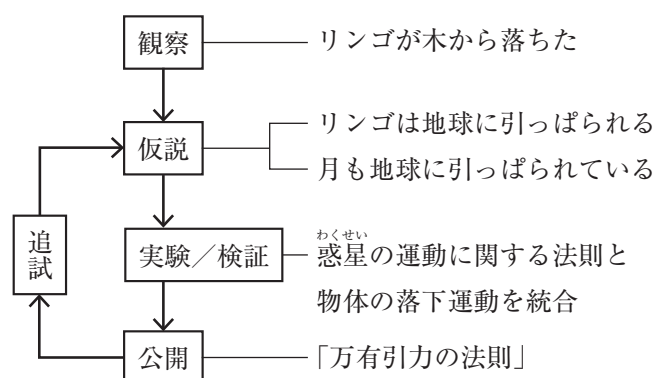
を例に説明しましょう。

イギリスの科学者にアイザック・ニュートンがいます。「ニュートンのリンゴ」のエピソードで知っている人も多いでしょう。一六六五年、すべての物体がお互いに引っ張りあっている、とする「万有引力の法則」を発見しました。いまなおイギリス人が尊敬する有名人ベスト一〇に入ってくる偉人です。

熟したリンゴの実が枝から落ちるのも、うっかり手を滑らせたコップが床に落ちるのも、経験的には同じ現象です。ニュートンはこうした観察から「全ての物質には地球の引力が働いている」と考えました。

ニュートンはさらに「引力が存在するならば、地球の周りを回っている月はなぜ落ちてこない？」という謎にも取り組みました。考え続けた結果、「月も地球の引力に支配されている。だから地球から離れず、周りを回り続けるのだ」という結論に至り、この現象を説明する単純な公式を考え出しました。

距離こそ違え、月もリンゴも地球の引力の作用を受け、同じ法則で運動しているというニュートンの発見は画期的なものでした。彼は成果を『プリンキピア』（『自然哲学の数学的諸原理』の略称）という書物にまとめ、世に問います。太陽の周りを回っている惑星の振る舞いにも、この法則はぴたりと当てはまり、その後の科学の発展を支えました。



【ポイント】①全過程が論文として公表される。

②飛躍やごまかしがない。

図 科学のプロセス（ニュートンの場合）

このように観察から仮説を導き、その仮説を第三者によって検証し、正しさを確かめる。仮説通りにならないければ再考を重ねてより確かなものへと鍛えていく、それが科学です。

さて、「水からの伝言」は、表向きは「実験」の体裁を取っていますが、さまざまな点で科学的とは言えません。

まず、「水が言葉を理解する」という、常識を超えた仮説に基づいていることに注意が必要です。突飛な仮説であればあるほど慎重な検証が必要ですが、この写真集では、仮説通りになった事例だけが紹介され、「どのように言葉を理解するのか」という、最も知りたいメカニズムについてまったく言及していないことに疑問を感じます。また、A の形で実験手法が紹介されていないため、第三者が同じ実験をして再現することも不可能です。

「再現性」は、科学のプロセスではとても大切なことです。誰がやっても、どこでやっても、同じ方法なら同じ結果が出ることを意味します。

たとえば、「水が言葉を理解する」という仮説に興味を持った人物が、自分の実験室で実験を繰り返したとしましょう。「ありがとうございます」の文字を⁽²⁾「見せた」水を一〇〇回凍らせて、きれいな（というのも判断が難しいですが）結晶になった回数が五〇回、そうではない回数が五〇回だった、という結果を得たとしても、実験手法が公開されていないければ、仮説の提唱者は「それは実験のやり方がまずいからだ。私は一〇〇回やって一〇〇回、きれいな結晶をつくれる」と言い逃れることができます。「誰がやっても、同じ条

件ならば同じ結果がでる」という原則が守られていない以上、科学的な議論ができないのです。

この状態を、科学の世界では「反証可能性がない」と言います。これも、科学と疑似科学を見分ける大切なポイントです。「誰かが主張する仮説を反証できるとき、それは科学である」。言い換えると、「第三者が追試して反証できるだけの材料を提唱者が提示しないとき、その行為や成果は科学とは呼べない」ということです。

こうして、長い時間をかけて、本人以外の多くの人が検証し、「ウソではない」と合意された知識の集まりが科学です。「観察する↓仮説を立てる↓結果を予測し、実験をする↓成功、失敗を含め結果を公表する↓第三者によって追試され、議論される（検証）」という作業のくり返しによって、科学は精度を高めていきます。

科学のプロセスと比較した場合の、疑似科学の特徴は次のようなものです。

「・観察⇨観察者が、現象を誤解したり、誇張したりする

・仮説⇨感情に訴える仮説を立てる

・予測⇨仮説から導かれる予測に論理性がない

・実験⇨仮説に対して肯定的な例は力説するが、否定的な例は無視する

・検証⇨反証するための検証法が考えられない

他者の検証を受けられるようになっていない」

(C・M・ウイン／A・W・ウィギンス『疑似科学はなぜ科学ではないのか』、奈良一彦訳、海文堂出版より)

「オッカムの剃刀^{かみそり}」という言葉があります。一四世紀の哲学者、オッカムが残した言葉で、「ある事柄^{ことば}を説明するためには、必要以上で多くを仮定すべきではない」というものです。言い換えると「たくさん^{りくつ}の仮定が必要な理屈^へは、屁理屈^へとみなせる」ということでしょうか。そういえば、くり返し検証され⁽³⁾ 確からしさを増した科学の法則は、往々にして単純明快です。

一方、「水からの伝言」に置き換えて考えてみると、「水は言葉を理解する」という仮説を認めるために、かなり無理のある仮定（水には目や耳に代わる感覚器がある）を受け入れなければなりません。そこがあいまいなので「「ありがとう」ではなく「サンキュー」は分かるのか」「善悪をどう判断するのか」「音楽が分かるのか」など、つつこみどころが満載^{まんさい}なのです。

皮肉なことにこの写真集は、外国語に翻訳^{ほんやく}されて人気を呼びました。もう一つ「心配だな」と思ったことがありました。学校の道徳の授業でこの仮説が紹介されたと聞いたからです。授業では、「人間の体の七割は水、これは科学的な事実です。この本で実験が示したように、水は言葉を理解します。だから友達に悪口を言う^{よこ}と体の中の水が汚れます」と教えられたといえます。

「水は言葉を理解する」という、実証されていない仮説が、科学的な事実のように先生から生徒に伝えられれば、誤解^{おそ}される恐れがあります。そもそも「友達に悪いことを投げつけるな」ということを教えるのに、科学を持ち出す必要はないでしょう。

さらにこれを利用したビジネスも広がりました。「お宅の水が汚れているかどうかを判定してあげます」と持ちかけ、悪い結果を示して高額な浄水器じようすいを売りつける手法です。こういう業者にお金をだましとられないためには、正しく疑い、反論する知恵〓カガク力が必要です。

「水からの伝言」を批判する記事を書いたら、反響はんきやうが来ました。「知り合いが似た商法に巻き込まれて損そんをした」というものもあれば、「これを疑似科学というなら、水が言葉を理解しないことを証明すべきだ」という反論もありました。

疑似科学を信じる人からの代表的な反論は、「批判するならニセモノであることを証明しろ」というものですが、⁽⁴⁾ 証明の責任は、提唱する側にあります。本人たちが、万人を説得できるデータやメカニズムを示さない限り、第三者が検証することは不可能です。

「反証できるものが科学である」。このことを知っていれば、これから疑似科学に出会っても、胸を張って「いいえ、私は信じません」と言えるはずです。

(元村有希子『カガク力を強くする!』より)

問一 あとがきには「ひとりよがりの本になるのではなく、みなさんからご意見をいただいて、この研究を科学的、哲学的な意味合⁽¹⁾

いに引き上げていく方向に向かうことを願っています」と著者のコメントがありました。とありますが、筆者はこのコメントをどのように受け止めていると考えられますか。最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の力だけでは研究を完成できないと訴^{うった}える謙^{けん}虚^{きょ}さに感心している。

イ 疑似科学であることに気づかず本物の科学だと思い込んでいることにあきれている。

ウ 謙虚さを装^{よそお}うことで人々の信用を得ようとするずるい態度だと批判している。

エ 科学的かつ哲学的という両方の要素を満たすのは無理だと感じている。

問二 図の「追試」とはどのようなことですか。本文をふまえて五〇字以内で説明しなさい。

問三 A にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 論文 イ 誘導^{ゆうどう} ウ 法則 エ 観察

問四 「見せた」⁽²⁾ とありますが、筆者はなぜ「」をつけたのですか。説明しなさい。

問五 確からしさ⁽³⁾とありますが、なぜ「確かさ」と言い切らないのですか。その理由としてふさわしいものには「A」、そうでな

いものには「B」と答えなさい。

ア その仮説が「確か」だと言えるようになるまでの必要な回数の実験が終わっていない段階では、科学と呼べる条件を満たしていないから。

イ 現在支持されている法則も、今後行われるだろう追試や新たに提唱される仮説によって、否定される可能性があるから。

ウ 科学とは検証によって精度を高めていくものであり、絶対的な「確かさ」にたどり着いたと考えるしまったら科学とは言えないから。

エ どんなに繰り返し検証されても、科学にはたくさんの仮定が必要であることは否定できず、結局は屁理屈だと言えるから。

問六 ⁽⁴⁾ 証明の責任は、提唱する側にあります

とありますが、「提唱する側」とはどのような人のことですか。次のア～エの中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仮説を提出した人

イ 仮説に反論する人

ウ 仮説を信じる人

エ 仮説を利用したい人

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ①作品のコウソウを練る。
- ②食料をチヨゾウする。
- ③ホウリヨウを祈願^{きがん}する。
- ④そんな要求はシヨウフクできない。
- ⑤墓前に花をソナえる。